

---

# 唯我独尊！

紗刃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

唯我独尊！

### 【Nコード】

N6818Y

### 【作者名】

紗刃

### 【あらすじ】

私立帝嶺高等学校　此処は、ちよつと、いや90度変わった自己満足で暴走的な教師と生徒が集まっていた。遅刻は当たり前、理事長自らの特別授業も！？　自由すぎるのもいいところ！

## 高校生活の幕開け

桜の芽が徐々に芽吹き始めた今まさに、帝嶺高校の入学式が行われていた。

帝嶺高校は敷地面積が東京ドーム一つ分ある、莫大な資産を持つ私立校である。

その敷地内には理事長の愛する田畑があり、生徒の生活する寮があり、また2ヶ月は迷子になるという巨大な校舎が聳え立つ。

その校舎の脇。設備の整った第一体育館で入学式は行われていた。新入生が緊張した面持ちで椅子に座り壇上を見つめ、その後ろでは保護者が我が子の姿を取らんとビデオやカメラを手にしている。

そんなどの学校でも同じイベントが行われているこの入学式の最中、脇に控える教師集団は私語を慎むどころか平然として会話していた。

「ちよおつと〜…理事長様はまだナノカ？」

そう喋ったのは両手にパペットを嵌めた跳ね毛が特徴の女教師。大きく丸い瞳はキラキラ輝いていて、外見は学生とそう変わらない。その横で足を組んで座る黒縁眼鏡の男性は大袈裟な溜息をついて見せた。

「いつもの事だろ。でも、今日は确实遅刻だよな。あと15分で終了だ」

チラリと腕時計を見て時間を確かめる男。その隣で大きな欠伸をしたのは切れ目の男性。

「……ねむ」

「出雲クン。今までチミは眠っていたヨネ？」

女性は声をかけてパペットの口を上下に開閉して言った。隣の男性はそれに小さく笑って頷いた。

「…否定は出来ないよな。にしても、今日も出席者が少ないな」

男性は、ずらりと並べてあるパイプ椅子を見た。呆れる訳でもなく文句を言う訳でもない。これがこの学校の教師なのだ。今出席しているだけでも8人。少なすぎる人数だ。

「毎年毎年、よくこれで入学者がいるよな」

「そりゃあ不良高校だからネエ」

パペットの口を動かし遊びながら女性は答えた。帝嶺高校は、スポーツ名門校として有名なのと同時に不良校としても有名である。不良校と言っても、外見のガラの悪さだけであるが。

すると、体育館の外からヴォンというバイクの音が聞こえた。それに気づいたのは生徒と教師だけで、保護者は我が子に夢中で気づかない。出雲脩二郎いすしゅうじろうは体育館の入り口に目をやって小さく呟いた。

「…来たな」

そう言った直後、体育館の入り口が爆発音を立てて開いた。正式には扉がぶつ飛んで行ったと言うのが正しい。新入生と保護者のどよめきと悲鳴が混じり合い会場は混乱する。

その中を漆黒のバイクの運転手は保護者や新入生の間を通り壇上へと飛び乗った。バイクの後部に乗っていた者は、メットを外してバイクから降りた。

スーツを身に纏いきつちりと着こなしたその姿は紳士そのもの。だが、残念なことに性別は女である。そう、彼女がこの学校の理事長。

彼女は壇上の真ん中に移動して、マイクを握った。

「あー… 新入生諸君、入学おめでとう。私がこの学校の理事長です」  
にっこりと微笑んだその姿に、安堵と不安の混じった雰囲気へと変わった。いつの間にかバイクの主は壇上から降りて教師側へと移動していた。

「この学校の新たな生徒に心から歓迎の言葉を贈ります」  
静まり返った体育館に、彼女の声が響き渡る。

「この3年間、充実した学校生活を送ると共に、大切な何かを見つけて下さい」

彼女は微笑んだまま、慈愛に満ちた瞳で新入生たちを見つめた。

「長い話はしません。以上で歓迎の言葉とします」

会場全体の空気が止まったような感じがした。短すぎる話に新入生、保護者共々驚きを隠せないようだ。

彼女はバイクのスイッチを切った後、一礼して壇上から降りた。そのまま司会者は何事もなかったかのように入学式を進めた。その側で理事長とバイクの主、教師達は話をしていた。

「悠さん、遅い」

黒縁眼鏡の奥から、呆れるでもなく怒るでもない瞳が真っ直ぐに彼女を見ていた。それに彼女、狩谷悠里かりやゆうりは笑って答えた。

「ごめん。ちょっと寝坊しちゃってさー。言葉も考えてなかったから時間かかったんだよねー」

「それで、緋冴に連絡とってバイクで吹っ飛ばして来たってわけか」  
彼はチラリとバイクの主の方を見れば、彼女はメットを取って頭を左右に振った。そして片手にメットを抱えて彼に向き直り視線を彼に移した。

「真広さん…悠里の寝坊なんていつものことですよ。そう目つき悪くしないで」

「この大切な日に遅刻なんて初めてだぞ。目つき悪くせずにいられるかっての」

「二人とも、喧嘩は止めましょうねエ〜?」

二人の火花が飛び交う中に、仲裁に入っていくパペットの教師。悠里はそれに苦笑して、切れ目の男性の隣に立ってそれを見ていた。

「あらまア、真広ちゃんと冴ちゃん荒れてるわねエ」

二人の横にやってきたのは、背の高い…男性。その口調はオネエ系と言ってよく、唇に人差し指を添えていた。

「悠さんが遅れてきたもんだから、真広ちゃんは荒れるわねエ…出雲?」

「…俺に振るな、二千翔」

同意を求める彼、姉川あねがわにちか二千翔に出雲は素気なく返した。そんな出雲に二千翔はぶくーつと頬を膨らませて見せた。

「んもう…でも、羽音ちゃん、早くしないと殴られるわよオ?」

その二千翔の言葉に悠里は鼻で笑った。

「あれは俺の下僕だから大丈夫だ」

「どっからそんな根拠がでんのよ」

そんな話をしている間に仲裁役の羽音が真広に吹っ飛ばされた。そして真広と緋冴の喧嘩は次第にエスカレートしていき、パイプ椅子までが飛び交い始める。二人の仲裁にと教師陣は急いで止めに入る。こんな教師達を横目で見ているのは新入生たちで不安げな表情が表れていた。こうして無事になんとか入学式は終わり、今年も帝嶺高校の学校生活が幕を開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6818y/>

---

唯我独尊！

2011年11月20日19時15分発行